

# イギリス科ニュースレター

November 2023

31号

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース  
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

(8号館 402号室)TEL/FAX 03-5454-6304 (直通)

Email: [british\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp)Web: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>

## 主任挨拶

西川 杉子

今年度イギリス科主任を務めます西川杉子です。主任は3度目となりますが、よろしく願い申し上げます。

昨年度はサバティカルをいただき、コロナ禍以降、初めてイギリスとヨーロッパ大陸をたずねることができました。ただ、日本からの短期滞在者にとっては、コロナ以前に比べると渡航はかなり厳しくなったと感じました。

イギリスではオックスフォードとウインブルドンの友人宅に居候させてもらい比較的恵まれた条件で滞在することができましたが、覚悟はしていたとはいえ、交通機関の混乱や鰻上りに物価が高騰していく様は、何度も呆然としました。

極めつきは、ヨーロッパ近世史の専門家が集まるバンガー大学(ウェールズ北部)での会議に参加した帰りのことです。コロナ前は60人前後が集まった学会でしたが、今回は参加者は約20名でした。主催者によると、私とニュージーランドから参加した研究者以外は、全員が車での参加とのこと。それでも学会中に鉄道ストはなく、最終日の報告終了後、無事にロンドン行きに乗車したのですが——国境の町チェスターの駅に入ったところで列車が動かなくなってしまいました。駅員に事情を聞いたところ 'We lost the driver' とのこと。つまり運転手がウォークアウトしてしまったのです。しばらく待つと「チェスターが最終で入ってくる電車があるから、それをクルーまで行かせる、それに乗り換えて、クルーでロンドン行きに乗ってくれ」というアナウ

ンスがありました。チェスター駅に入ってきた列車は、車両が4両しかないローカル線用だったので、ウェールズからの乗客全員が乗り換えるとすし詰め状態となりましたが、これでなんとかクルーでロンドン行きに乗ることができました。ところがここで、また車内アナウンス。「この列車は、ロンドン・ユーストン駅まで行きますが、進路を変更して、ウォーヴァーハンプトンとバーミンガム経由になります」。要は、ウォークアウトした運転手は他にもいたのでしょう、進路外の他の都市でも乗客を拾って、ロンドンまで行くというのです。クルーからロンドンまでは通常2時間弱なのですが、ユーストン駅に到着したのはたっぷり5時間後でした。

新聞やBBCの報道を見る限り、イギリスの交通機関の混乱や物価の上昇はまだ続くのでしょうか。日本からの渡航者にはこれに円安の影響が加わります。イギリス科の伝統で、今でも、イギリスで学ぶ学部生や大学院生がいますが、彼らが厳しい状況の中でも、充実した留学生活を送れるように祈るばかりです。



## 教務補佐着任のご挨拶

近藤 亮介

皆様、はじめまして。2022年10月にイギリス研究コース教務補佐に着任いたしました近藤亮介と申します。この場をお借りして、簡単な自己紹介をさせていただきます。

大阪出身の私は、中学時代に Queen や The Smiths などのブリティッシュ・ロッ

クに目覚め、高校時代に YBA と呼ばれる現代美術の動向に興味を持ったことをきっかけに、高校卒業後にロンドン大学 University College London 美術学部へ進学しました。美術学部の正式名称は Slade School of Fine Art で、アントニー・ゴームリーやレイチェル・ホワイトリードら著名なイギリス人作家が輩出したことで知られています。円安と物価高には悩まされましたが、ロンドンで暮らした4年間で現在の生活および研究の基礎となりました。これが私とイギリスとの関係の始まりです。

私の専門はもともと美術(制作と理論)でしたが、卒業論文で風景式庭園をリサーチして以来、対象を文学、庭園、都市計画へと徐々に広げ、今ではランドスケープの歴史と理論を幅広く研究しています。最近では、イギリスとアメリカや日本との比較を中心に、ニューヨークのセントラルパークや明治・大正時代の洋風庭園の研究に取り組んでいます。

好奇心の赴くままに多方面へ研究を広げてきましたが、今もイギリスが基本にあることは変わりません。帰国後は一旦就職しましたが、イギリスの風景への思いが募り、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論コースへ入学しました。大学院では、河合祥一郎先生の薫陶を受け、また故安西信一先生からイギリス美学・庭園論の真髓を教わりました。博士課程満期退学後は、2020年4月～22年3月に教養学部英語部会の助教を務め、アルヴィなほ子先生や小川浩之先生にもご指導いただきました。

これまで私は10年以上にわたって駒場へ通い、イギリス科の先生方には授業内外で大変お世話になってきましたが、イギリス科に関わるのは今回が初めてです。ただ、初めてコモンルームへ足を

踏み入れたとき、大学らしからぬ cozy な雰囲気にかつて住んでいたロンドンのフラットを思い出し、すぐに親近感を抱きました。同時に、座右の書である安西先生の『イギリス風景式庭園の美学』を書棚に偶然見つけ、感慨を覚えました。イギリス科が刻んできた歴史の重みを感じながら仕事ができる喜びを、日々感じています。

とは言え、まだまだイギリス科の全体像を把握できておりません。教務補佐の業務につきましてもは不慣れな点が多く、イギリス科の先生方や学生の皆様にはご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、ご指導いただけましたら幸いです。何卒よろしく願い申し上げます。



## Our tenure at Tokyo University

David Onnekink

Martine Veldhuizen



In October 2022 it was our privilege to be visiting professors at the Department of Area Studies at Tokyo University. Martine Veldhuizen is Assistant Professor at the Department of Languages, Literature and Communication at Utrecht University and specializes in Medieval European history and literature, specifically in relation to freedom of speech. David Onnekink is Associate Professor at the Department of

History and Art History at Utrecht University and specializes in Early Modern and Modern International and Global History.

Each of us taught one course in Tokyo. Martine offered the course 'The history of free speech: Telling truth to power in premodern Europe'. The course focused on the history of free speech in premodern Europe. Although freedom of speech was then not a civil right, vocal criticism of power in European towns was widespread. Students examined the mentality behind this pervasive practice of telling someone's 'truth' to power by discussing current studies on free speech and by analysing truth-tellers in contemporary textual sources (translated into Modern English). They gained insight into the conceptualization and social acceptability of freedom of speech before the Modern age. They connected these insights to current discussions about the impact of new technologies on concepts related to free speech in our modern world.

David offered the course 'Empire and religion. The religious dimension of the British Empire (1600-2000)'. Students learned about the general outline of the global expansion of the British Empire between 1600 and 1950 and the relationship with religion. They studied the encounter between world religions, such as Hinduism, Buddhism, Islam and Christianity in the context of the British Empire, about the impact of British imperial policy on nature, and considered how post-colonial global religious non-governmental organisations in a way continue the legacy of Empire and religion in our modern world.

We were both impressed by the speed with which our students acquainted themselves with the new themes they were offered and the originality of the papers they submitted at the end of the courses. We also enjoyed learning from them about Japanese culture and society.

Together with our two children Rebecca (10) and Seth (5) we lived in an apartment in Meguro City. Especially for them it was a great experience, learning about Japanese culture and language and telling this to their friends back home. Our favourite place became the botanical gardens at the Tokyo Metropolitan Teien

Art Museum. During weekends we visited various places in Tokyo and made day trips to Hakone and Kamakura.

We are very grateful to Tokyo University and the Department of Area Studies, especially British Studies Section, for this opportunity, and for the help of supporting staff in the administrative building. And we are especially grateful for the guidance, assistance and hospitality of Professor Sugiko Nishikawa, who invested many hours in the long administrative organisational trajectory leading up to our visit, and acted as our guide in Tokyo. All in all this was a wonderful academic as well as cultural experience.



## 東大後の来し方行く末

草光俊雄

東京大学を定年より 5 年前に辞めてからもう 18 年になります。その後、山内久明先生の後釜として放送大学に勤め、そこで十数年、僕も今年は喜寿となります。随分と歳をとったなという感想ですが、実際はまだ若い気分です。

放送大学ではテレビやラジオの授業を作るという、自分でも初めての試みでしたが、面白い授業が作れたのではないかとやや自負しています。実は東大在職中に、山内先生の作られた「イギリスの歴史と社会」という授業に出演したことがありましたが、自分の責任で番組作りをするについては責任感と楽しみと両方の気持ちで緊張しました。しかし自分のアイデアで新しい授業を考え誰と一緒に作ろうかと思案するのは、まるでプロデューサーになったようで新鮮な経験でした。最初、当時は言語文化にいた宮下志朗さんと一緒に、大学院科目として「ヨーロッパの歴史と文化」という授業を作りました。他にも地域文化にいた杉田英明さん、一橋大学の土井恒之さん、慶應義塾大学の高宮利行さん、大阪大学の古谷大輔さんなどにもお願いして幅広いテーマの充実した講義をしていただきました。我々はイギリス、フランス、イタリアを取材旅行で訪れ、イタリアでは地域の客員教授として来日したことのあるジョバンニ・コンティーニ・ボナ

コッシさんにも出演してもらったりして、楽しい思い出をしました。

イギリスでは僕の留学時代の友人たちが皆偉くなっていて、ウォリック大学教授だったマクシーン・バーグさんには産業革命のこと、ナショナル・ギャラリー館長(当時)のチャールズ・ソーマリ・スミスさんには絵画について、オークションハウス、サザビーズのイギリス社長だったジェームズ・スタートンさんにはオークションの歴史や、美術蒐集の話(彼自身ロクスバラ・クラブという書物蒐集家のクラブの会員)など興味深い話を聞くことができ、日本の学生たちにも大変新鮮で有意義な話だったと思っています。フィレンツェのジョバンニさんには彼の実家でワインやオリーブオイルを作っているお屋敷で取材させてもらい、取材班全員(カメラマン、録音技師、通訳、そしてバスの運転手まで)が美味しいフルコースの昼食とワインをご馳走になったりしました。宮下さんはその後放送大学でも同僚になりました。

放送大学のヨーロッパでの取材旅行はその後もう一回あり、イギリス科出身の現在は津田塾大学教授の菅靖子さんと一緒に作った「植物から見るヨーロッパの歴史」という授業では、僕が先に、ライデン大学の植物園、スウェーデンのリンネの植物園などを取材した後イギリスに渡り、菅さんと合流し、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツのCEOとしてナショナル・ギャラリー館長から移って来ていたソーマリ・スミスさんをインタビューして主として18世紀の建築家について話を聞き、その後ロンドンのチェルシー葉草園の園長、オックスフォード大学植物園の園長などから話を聞き、20世紀に作られたシシングハースト庭園、レッチワース田園都市、ウィリアム・モリスのケルムスコット・マナーハウスなどをめぐり、最後にはロンドンのキューガーデンの取材をして帰国しましたが、これもきわめて充実した取材旅行で、多くのことを勉強することになりました。授業は与えるだけでなく多くのことを学ぶことだということが実感できる旅でした。

その他にも幾つか思い出に残る授業を作りましたが、例えばラジオ科目で、関西大学の北川勝彦さんと作った「アフリカ世界の歴史と文化」はアフリカとヨーロッパとの関係を古代から見ていこうとするもので、僕にとっては全く白紙

の状態から始まって、北川さんの助けもあって多くのことを学ぶことができた授業でした。またティモシー・ハリスさんと作った「Poem into Song」という授業は音楽になったさまざまな詩を扱っていて、ティムが詩の素晴らしい朗読をしてくれて音楽をたくさん聴き、CDで手に入らない曲はティムが連れてきたイギリスの古い曲の最高のソプラノの波多野睦美さんとリュートのつのだたかしさんに生の録音をお願いしたりと贅沢な授業を作りました。

2017年に放送大学を定年退職し、その前年にみすず書房から出版した『歴史の工房』の出版祝いを兼ねて、外国特派員協会パーティを開いてくれたのはとても感慨深いものでした。東大や放送大学の同僚、東大時代の教え子たちなどたくさん集まってくれました。山内先生、玉泉八洲夫先生、富士川義之先生をはじめ、中学高校の友人柏木博さん、富山太佳夫さん、みすず書房の編集者尾方邦夫さんなどから祝辞をいただき、イギリス科の助手をしていた現在は早稲田大学教授の渡辺愛子さんと菅さんが司会をしてくれて、嬉しかったし、なんて自分は幸せな教師だったかと思いつく思いました。

ところがその年の夏、信州の山荘に出かけたその翌日に具合が悪くなり、救急車で運ばれた地元の病院からさらに松本の病院に搬送され、小脳の脳梗塞と診断され、即リハビリに専念する毎日を過ごしました。幸い4週間足らずで退院でき、ほとんど後遺症も残らずに元気になって帰って来たことにはラッキーだったと思っています。実は僕はすごいヘビースモーカーで、毎日ショートピースを50本は吸っていたし、それ以外にもパイプ、葉巻とニコチンまみれだったのが、退院以来ピタッと喫煙をやめました。その年は退院した後、ずっと山荘で過ごし、夏から秋そして初冬の信州を満喫することができ、また、病から回復していく己を観察することもできました。その数年前東日本大震災で福島原子力発電所が崩壊したときにも雪が降る山荘に避難しましたが、それ以降初めての長期間の山荘暮らしでした。それがコロナのパンデミックで東京を逃げ出して春夏秋冬と一年の大半を山小屋で過ごすことになるとは思ってもみませんでした。僕の家人はこの時とばかりそれまで草ボウボウだった庭の大改造に着手し、今

では見違えるような庭園になっています。

そしてその後の大事件は、東京の我が家の真下をリニアモーターカーが走るという寝耳に水のニュースが飛び込み、祖父母以来の土地を離れることを決意したことです。いろいろな経緯もありましたが、結局鎌倉への移住を決め、人生の最後を鎌倉の住人として楽しもうということになりました。鎌倉ペンクラブの会員になり、すぐに幹事に推薦されて、毎月開かれる幹事会で今までとは全く異なったタイプの人々と一緒に飲食したり、町内会が実にまとまっていて和気あいあいとしているのですぐに近所の人たちと親しくなり、東京ではなかった身近な社交が楽しみとなってきています。鎌倉は山に囲まれていて、夫婦二人で山歩きをしています。ある時休息してチョコレートを食べたら背後からバサバサッとトンビが食べかけのチョコバーをひっさらって行ったことがありました。是枝監督の「海街diary」に出てきた衣張山も何度か登りました。北鎌倉の東慶寺には両親の墓もあり、そんなに遠いところという感じはなかったのですが、お寺や神社にも時々出かけて歴史の勉強もしています。引っ越ししてすぐにNHKの大河ドラマで「鎌倉殿の13人」が始まったので、余計鎌倉への関心が高まったといえますが、本音を言うとなれに出てくる役者たちが気に食わなくて、ほとんど見ませんでした！



鎌倉の天園コースから相模湾

喜寿を迎えて、菅さんたちが語り合ってお祝いしてくれると言っています。教師冥利に尽きることです。昔現役時代によく学生たちを連れて行った浅草の「駒形どぜう」が宴会の場で、今は立派になった学生たちと語り合うのを楽しみにしています。イギリス科での駒場時代が本当に幸せだったなと思知らされるこの頃ですが、まだこれから書きたいこともあります。学者として生きて来たのだからその成果をもう少し世に問うてみたいと考えています。生涯現役で老後を全うしたいものです。



## 駒場との縁

佐藤和哉 (36 期)

昨年と今年、多くのかたのご指導と大変な幸運により、若い読者に向けて本を執筆する機会を与えていただくこととなり、『〈読む〉という冒険 イギリス児童文学の森へ』（岩波ジュニア新書、2022 年）と『物語、英語で読んでみない？』（岩波ジュニアスタートブックス、2023 年）という形にすることができました。ごくささやかな成果ですが、これらがイギリス科の、そして駒場の教育の恩恵によるものである、というのが小文のテーマです。

『冒険』は、イギリス児童文学から 7 種のテキストを選んで、その読みかたを解説するという体裁をとりながら、文学的テキストへのアプローチのしかたを中高生から大学 1~2 年生くらいのみなさんに説明しようとした本です。この本ができあがるうえで、私が学部生時代のイギリス科主任でいらした行方昭夫先生のお世話になりました。それはこういう経緯です。

2020 年度からのコロナ禍における勤務先のオンライン授業を、当初、私はほとんどの授業において文字媒体で構成しました。動画はどうしてもそれなりの大きさのファイルになるので、学生さんの通信環境が分からないこともあって、できるだけ通信負荷が少ない形式にしようと思ったからです。2020 年の夏、近況報告として、ある授業のファイルを行方先生にお送りしたところ、岩波ジュニア新書を数多く執筆されている先生か

ら、「これをもとに、ジュニアに合うような本ができるのでは」とのお言葉をいただき、同編集部のかたとつないでいただいたところから、『冒険』が生まれました。そういうわけで、私がイギリス科で学んだという経歴が、直截的にこの本の出版へとつながっています。

しかし、この本がイギリス科の教育の賜物であるのは、出版のいきさつに留まりません。『冒険』では、たとえば新歴史主義やインターテキストの考えかたなどを意識しながら説明しようとした。それとともに、歴史的な文脈を重視し、歴史の視点から作品を読み直すことにも務めました。文芸理論への意識は、1980 年代のイギリス科の授業で、当時出版されたばかりだった Terry Eagleton の *Literary Theory* (1st. ed., 1983) を由良君美先生から教えていただいたことに発想の原点がありますし、イギリス史の諸局面については、今井宏先生、木畑洋一先生に教わったイギリス史への関心がその根底にあります。

さらに、その作品を読むことに現在どういう意味があるか、を若い読者に考えていただきたくて、この本では、『クリスマス・キャロル』の慈善に対する見方を通じて社会福祉のありかたに触れたり、『第九軍団のワシ』の描くローマン・ブリテンをアメリカのアフガン撤退と関連づけたりするような説明をしました。このような同時代への関心は、大学に入学した年に受講した「歴史学一般」という授業で、弓削達先生が、「大学で学ぶ歴史学には社会的有用性がなければならぬ、そしてその有用性とは、いかに人類が未来を生きのびるかに寄与することである」という意味のことを説かれたのとリンクしています。私は文学研究もそうであるべきだと考えています。このように、『冒険』は、私が駒場、そしてイギリス科で教育を受けていなければ生まれ得なかったと言えます。

この本がさらに次のプロジェクトにつながり、2023 年 10 月に出すことになりました『物語、英語で…?』は、岩波書店が中学生をおもな読者として 2021 年に創刊した「岩波ジュニアスタートブックス」の一冊として刊行されました。この本では、英語の物語を 3 篇選び、解説と註をつけて英文読解の解説をし、さらに物語の読みかたについて触れるところまで扱いました。2 篇は、graded readers の「最後の葉」と「まだらの紐」を用い、3 篇めは、紆余曲折ののち、ラ

フカディオ・ハーンの「ゆきおんな」としました。物語の解説を書くうえで、とくにハーンについては、平川祐弘先生や牧野陽子先生など、駒場の比較文学比較文化に関わっていらっしゃる先生方の研究がもっとも参考になりました。

そして、どちらの本でも、それを書くうえで基本姿勢としたのは、テキストを徹底して読み込む「精読」です。『物語、英語で…?』は、中学生への多読学習入門ではありますが、平易に書き直されている英文であっても、解説では、それとしっかり向き合うことに努めました。イギリス科で私が受けた教育のもっとも貴重なエッセンスはこの「精読」であり、今後も追求していくべき研究の基本的態度であると考えています。

イギリス科、それから「駒場」とのつながりが、今の自分にどう生きているか、ということをお願いするために、自著の紹介をさせていただきました。次世代の皆さまにながしかを伝えることで、せめて「恩送り」をしたいと考えております。

## 卒業生の方へ

イギリス科の情報などにつきましては、イギリス科のウェブサイトをご参照ください。

<http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/>

イギリス科ニューズレターは紙媒体と電子媒体の 2 種類の方法で皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体にてお送りした方で、電子化にご協力いただける方は、下記の卒業生専用アドレス

[igirisuka\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp) まで、送付先アドレスのご連絡をお願いいたします。

また、ご連絡先（住所・電話番号・メールアドレス等）にご変更がおありの場合も、上記までご連絡をお願い致します。

## 2023 年度 イギリス科運営委員

西川杉子 (主任)

小川浩之 (S セメスター副主任)、  
後藤春美 (広報委員、A セメスター副主任)  
アルヴィ宮本なほ子 (地域文化研究専攻副専攻長)

近藤亮介 (教務補佐)